

双胎児をもつ母親の対児感情の差異に関する研究

1 病棟 4 階東

○富本恵美 宇多川文字 斎藤恵子 櫻田陽子 (1 病棟 6 階)

I. はじめに

児童虐待の子供側のリスク要因として双胎があげられている。このことは低出生体重児で加療を要したこと、発達遅滞および育児の負担などが関連していると言われている。当周産母子センター（以下当センターと略す）においても退院した双胎児のうち、体重が軽く母子分離期間が長かった児が虐待と思われる骨折で入院するという体験をした。

双胎に関するこれまでの研究で、ツインキッズクラブのアンケート調査では、「ツインを育てている母親の約半分が愛情の差を感じている」¹⁾との報告がある。また花沢は児に対する感情を「対児感情」と呼び対児感情の測定法として「評定尺度」を作成し、さまざまな対児感情の研究を行っている。しかしこれまでに双胎児に対する母親の対児感情を比較した研究は見当たらない。

そこで今回、双胎児をもつ母親の対児感情を知るために、アンケート調査を行い、対児感情の差異とそれに影響を及ぼしている要因について分析した。

用語の定義

<対児感情> 児に対する感情であり、愛着的すなわち児を肯定し受容する方向の感情を接近感情といい、嫌悪的すなわち児を否定し拒否する方向の感情を回避感情と呼ぶ。

<拮抗指数> 接近・回避感情の拮抗度（回避得点÷接近得点×100）。

拮抗指数は指数が高いほど両感情が強く拮抗することを意味する。

<育児動機> 「赤ちゃん」あるいは「子供」を育てたい、という動機。

II. 研究方法

1. 調査期間：1997年7月～1998年4月

2. 対象：1996年3月から1998年2月までに当センターで双胎児を出産した母親22名。

3. 研究方法：花沢の「対児感情評定尺度」と「育児動機評定尺度・第1形式」を使用し、これに双胎妊娠と知った時と母児同室となった時の気持ち、母親の体調、育児支援の状況についての項目を加えたアンケート用紙を作成し、郵送にて回答を求めた。なお、回答はすべて統計処理した数字のみ扱われ、個人を特定するものではないことを添えた。

なお、「対児感情評定尺度」と「育児動機評定尺度・第1形式」については花沢の採点法により、接近得点、回避得点、育児動機得点を『非常にそのとおり』を3点、『そのとおり』を2点、『少しそのとおり』を1点、『そんなことはない』を0点とした。アンケート項目は、「あたたかい・うれしい」など接近感情14項目、「よわよわしい・うっとうしい」など回避感情14項目、「だっこしたい・あやしたい」など育児動機14項目とした。分析方法は、双胎児の

うち「先に母児同室になった児・後になった児」「出生時体重の軽い児・重い児」に分け、対児感情・育児動機の違いを t 検定により求めた。さらに、双胎児間の拮抗指数の差を求め「差がないもの (A 群)・5 未満の差があるもの (B 群)・5 以上の差があるもの (C 群)」の 3 群に分け、出生時体重・母児同室の時期・育児動機の差との関係について new Duncan's multiple range test により検定した。

Ⅲ. 結果

アンケートの回収率は 86.4% であった。対象の基本データは表 1 に示す。

- ①「妊娠希望の有無」については 17 人が望んだ妊娠であり、2 人が望んでいなかった妊娠であった (図 1)。
- ②「双胎妊娠と知った時の気持ち」はとてもうれしかったが 9 人、うれしかったが 4 人、あまりうれしくなかったは 6 人であった (図 2)。
- ③「母児同室となった時の気持ち」は児 1 人 1 人に対する気持ちとして、とてもうれしかったが 24 人、うれしかったが 12 人、あまりうれしくなかったが 6 人であった (図 3)。
双胎児間で母親の気持ちに差があったのは 3 組であった。
- ④「双胎児の発育状態」は順調が 31 人、まあまあ順調が 5 人、あまりよくないが 2 人であった (図 4)。
発育状態のあまりよくなかった児は、低酸素性虚血性脳症と心疾患がある児であった。
- ⑤「母親の体調」はよいが 9 人、まあまあよいが 9 人、あまりよくないが 1 人であった (図 5)。
- ⑥「育児支援の状況」については複数回答で、全く支援がない人が 2 人、その他の人は夫、実母、義母など複数の人から支援を受けていた。

次に対児感情と育児動機について結果をまとめた。

1. 母児同室の時期の違いによる検討 (表 2)

先に母児同室となった児の平均入院日数は 11.8 日、接近得点の平均は 31.2、回避得点の平均は 6.2、拮抗指数の平均は 19.0 であった。後になった児の平均入院日数は 22.8 日、接近得点の平均は 32.0、回避得点の平均は 6.7、拮抗指数の平均は 19.4 であった。両児間に接近得点・回避得点・育児動機得点とも有意差はみられなかった。

2. 体重の違いによる検討 (表 3)

出生時体重の軽い児の平均体重は 2031.8 g、接近得点の平均は 32.2、回避得点の平均は 5.5、拮抗指数の平均は 18.7 であった。重い児の平均体重は 2375.4 g、接近得点の平均は 31.4、回避得点の平均は 6.7、拮抗指数の平均は 24.8 であった。両児間に接近得点・回避得点・育児動機得点とも有意差はみられなかった。

3. 拮抗指数の差による検討 (図 6)

双胎児間の拮抗指数により分けた 3 群間を比較検討したところ、A 群と C 群の間で、体重差と育児動機の差の 2 項目に有意差が認められた。(p < 0.05)。なお、拮抗指数の差が 135.1 であった特例は統計より除いて検定した。

IV. 考察

1. 母児同室の時期の違いと対児感情について

「双胎または品胎の子どもが生まれると、両親は、1人1人別々に愛着を抱くようになる。」²⁾ 「1人がもう1人より早く退院し、もしその差が数週間にわたる場合は、両親の最初の子どもに対する愛着が、もう1人の子どもの犠牲において促進されることがある。」²⁾ と言われている。

今回の調査で、当センターにおける母児同室の時期の違いでは母親の対児感情に有意差を認めなかったことより、母児同室の時期の違いが2週間程度であれば、対児感情に影響はないということがわかった。これは残された児に対し、面会や「すくすく日記」を通して愛着形成のための援助を行っていることがよい結果をもたらしたと考える。しかし、母児同室の時期の違いが長期にわたる場合は、母親が愛情の差を感じることも起こりうるので、今後も残された児に対し、母親が積極的にかかわりが持てるよう配慮するとともに、可能な限り母児同室の時期の差をなくすようにすることが必要であると考ええる。

2. 体重の違いと対児感情について

ブライアンは「生まれたときの子どもの大きさが非常に違う場合、母親は1人の赤ん坊をえこひいきすることが多く、たいていの母親は、大きい方の赤ん坊をかわいがる。」³⁾ と述べている。

私たちの調査では、必ずしも体重の重い児の接近得点が高いとは限らず、体重の軽い児と重い児との間に有意差はなかった。これは母親が面会の時、「同じに生まれたのに小さくてかわいそう、頑張っ。」と体重の軽い児に声かけしていたことから、体重の軽い児の方が気がかりでいとおしく思う気持ちもあるからではないかと考える。

3. 拮抗指数の差と対児感情・育児動機について

拮抗指数の差が大きい群は、出生時体重の差が大きいことから、成長・発達に違いがあると対児感情・育児動機に違いが生じやすいということがわかった。これは、成長・発達の違う児を同時に育てるという大変さと、どうしても2人を比較してしまう世間あるいは母親自身の思いによるストレスも関係していると思われる。このことより、体重差の大きい児を持つ母親に対しては、これらのことを念頭におき、ケアしていく必要があると考える。

また今回、特例として統計から除いた双胎児の一方は脳性麻痺の症例であったため、育児の大変さから回避得点が接近得点を上回る結果となったと考える。このように児に障害がある症例は特に注意し、今後虐待に結びつかないようにしっかりアプローチしていく必要がある。

V. まとめ

1. 私たちは今回の調査で双胎児に対する母親の感情に違いがあるのか、また、出生時体重や母児同室の時期が対児感情に影響しているのかを明らかにした。
2. 当センターにおいて先に母児同室となった児と後になった児とでは対児感情に有意差はなかった。
3. 出生時体重の軽い児と重い児とでは対児感情に有意差はなかった。
4. 出生時体重の差が大きいことや育児動機の差の大きいことが、接近感情と回避感情の拮抗の差に影響を及ぼしているということがわかった。

引用文献

- 1) 久保田奈々子. 双子・三つ子・四つ子・五つ子を育てている家庭の実態と意識アンケート調査のまとめ, ツインキッズクラブ会誌, 1997年6月, p38.
- 2) 竹内徹訳. 新生児ナーシングケア, HBJ出版局, 1990, p380.
- 3) エリザベス・ブライアン. 多胎をめぐる諸問題, NICU, VOL.6 NO.1, 1993. 1, p11.

参考文献

- 1) 花沢成一. 母性心理学, 医学書院, 1996.
- 2) 岡野知江子. 妊産婦の対児感情に関する検討, 日本看護研究学会, VOL.20 NO.2, 1997.
- 3) クラウス・ケネル, 竹内徹訳. 親と子のきずな, 医学書院, 1996.
- 4) 小平隆太郎他. 被虐待児症候群, 小児看護, 19(9) 1138-1143, 1996.

表1 対象の基本データ

母の年齢 (歳)	30.9±3.3
出生週数 (週)	35.6±2.2
出生体重 (g)	2232.0±413.0
NICU入院期間(日)	17.1±17.0
接近得点	32.0±6.0
回避得点	6.1±6.3
拮抗指数	21.3±25.5
育児動機	34.8±4.8

(mean±SD)

表2 母児同室時期の違いによる検討

	早い児	遅い児
母子同室時期(日)	11.8± 9.3	22.8±21.7*
接近得点	31.2± 5.8	32.0± 6.5
回避得点	6.2± 5.9	6.7± 7.4
拮抗指数	19.0±17.2	19.4±32.4
育児動機	34.1± 5.3	35.3± 4.7

*p<0.05 vs 早い児 (mean±SD)

表3 体重の違いによる検討

	軽い児	重い児
出生体重(g)	2031.8±438.4	2375.4±363.7**
接近得点	32.2± 6.0	31.4± 6.5
回避得点	5.5± 4.4	6.7± 7.8
拮抗指数	18.7±16.4	24.8±32.7
育児動機	35.3± 4.9	34.0± 5.5

**p<0.01 vs 軽い児 (mean±SD)

表4 拮抗指数の差による検討

	出生体重 の差 (g)	母子同室 の差(日)	育児動機 の差
A:0 (n=6)	155.7±147.2	3.2±2.9	0.0±0.0
B:0<, <5(n=7)	330.7±224.2	7.0±6.7	1.1±1.2
C:5≤ (n=5)	595.4±312.9*	21.2±29.5	1.8±1.8*

*p<0.05 vs A (mean±SD)

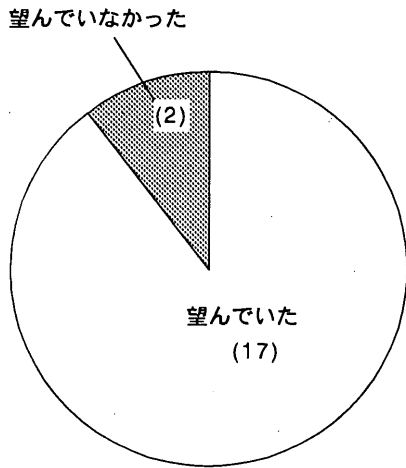


図1. 妊娠希望の有無

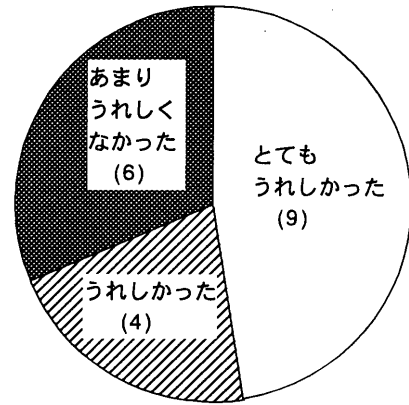


図2. 双胎妊娠と知った時の気持ち

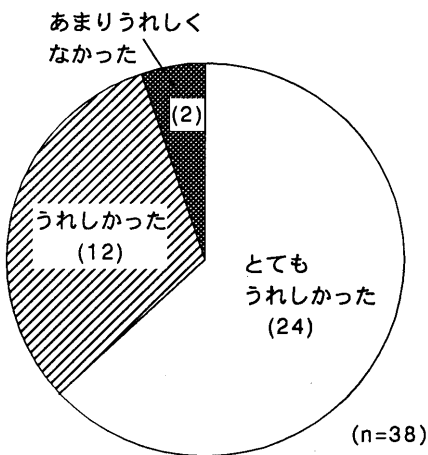


図3. 母児同室となった時の気持ち

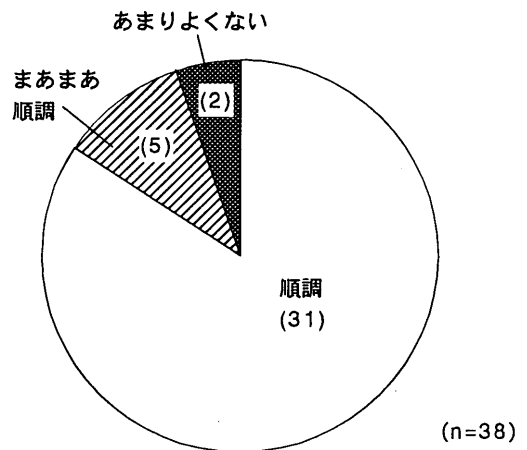


図4. 双胎児の発育状態

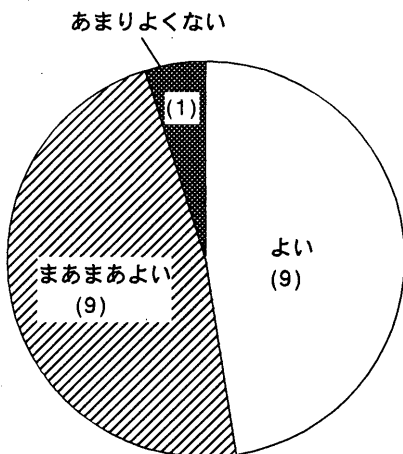


図5. 母親の体調

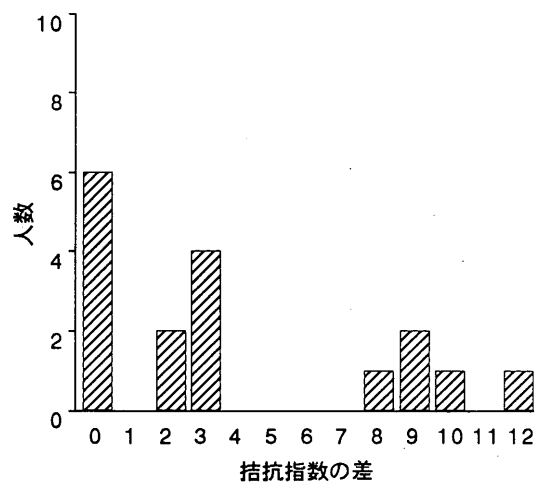


図6. 拮抗指数の差の分布